

花の生涯

舟橋聖一

新潮文庫

はな の しょう がい
花 の 生 涯

定価はカバーに表
示してあります。

新潮文庫 草11 D

昭和三十六年七月五日 発行
昭和四十九年四月三十日 二十四刷

著 者

舟橋 聖一
ふなはし せいいち

発 行 者

佐 藤 亮 一
さとう りょういち

発 行 所

株式 会社 新 潮 社
しんしやうしゃ

郵便 番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一
振替 東京 八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求
めの書店にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

花 の 生 涯

舟 橋 聖 一 著

新 潮 社 版

1491

目次

青柳のいと	七
雲うごく	三四
眉紅き人	六一
秋の湖水	八九
尾花のわかれ	一六
うす雪の竹	一四
登城すがた	一六
彦根牛	二〇二
黒船の章	二二七
密出国	二五五
おしろい椿	二八一
風濁る	三〇六
近衛菱	三三一

安政小唄	三五五
お吉お福	三七〇
らしゃめん記	三九九
コン四郎江戸へ行く	四三二
加茂川千鳥	四五七
大老職	四八三
妖霊星	五一八
横浜村	五四四
大獄篇	五七一
断罪	六〇四
飛ぶ雪	六三〇
君消ゆる	六六六
たか女後日	七〇二

花 の 生 涯

青柳のいと

長い雨季の終り。

夕空は久しぶりに、伊吹山の山頂まで、くっきり晴れわたって見えたが、芹川の水は、見違えるほど水嵩を増して居た。岸から二尺あるかないかで、水勢はいつになく鋭い。

さっきから、堤の上を往ったり来たりして居る浪人風の男があった。歩いたかと思うと、ふと立止って、水の面に、目を注ぐ。そうかと思えば、首を上げて、涯しない大空を遠く眺めた。

堤の東は、袋町の花街である。ことによったら、堤を下りて、この廓の揚屋に、登楼しようという客が、暫しの時を消すために、堤の上をそぞろ歩きして居ると思われないことはない。しかし、よく見ると、人態風俗、廓通いの粹客とは、どうしても受取れぬ。

年の頃は二十七、八。細長の顔で、眉は太く長いのが特長だ。然し目は切れ長で、色は白く、鼻筋が通って居るから、理智的ではあるが、柔い相である。

堤のすぐ下に、軒を並べた娼家の窓から、たか女は、川の水嵩を見ようとして顔を出した時、堤の上の、その男の姿に目を惹かれた。

見馴れない男だと思った。他国者にちがいない。物騒な時代だけに、藩士達は他国者の入国には必要以上に神経過敏となつて居る。よく、あんなところを、ブラブラ、やっていられると、意外な気がした。

向うでは、まだ、こちらが見ているとは気がつかない。桜の立木の下に居て、ジイッと水面を見下ろしながら、何か深い黙想にふけて居るらしい。

トント

と梯子を上る音がして、化粧を終えたばかりの雪野太夫が入ってくるなり、

「おや、お師匠さん——何を見ておいでなさるの」

と、声をかけた。たか女は、この若いお職の太夫に、三味線をおしえるべく、一日おきに、多賀神社の磐若院から、袋町の廊まで、出稽古に來ているのであった。ついでに、和歌の道も、手ほどきをして居るのである。

「川の水が増してきたので、それをこゝから見て居ました——」

「うそ、うそ。あの堤の上の、浪人を見ていらっしゃるのでしょうか」

「それでは、雪野さんも、気がついて居るのかいな」

「ついぞ、見馴れぬお侍。今夜は又、何かなければよいが——」

そういえば、浪人の目が、急にこの窓へ転じた様にも思われる。その目には、何ンとも云えない冴えた輝きがある。たか女が、傍に雪野の居るのも忘れて、思わず男の目を見返した時、浪人は、驚いた風で、忽ち川上のほうへ歩を移した。

たか女が、他国者と見た目に誤りがなく、その浪人風の男こそ、長野主馬であった。白襟、黒羽二重に、剣かたばみの縮緬の夏羽織。蠟色の大小を腰にさしている。

彼が、芹川堤を、うさん臭く、往ったり来たりしたのは、目的のところへ行くのに、まだ少し明るすぎるからであった。もう少し、暗くなつて、ものあやめを弁じない頃でないと、都合が

わるいのである。

というのは、今宵はじめて、埋木舎うもれぎのやに住む彦根藩主の末弟、直弼なおすけに会う好機会にめぐまれようとしているからだ。

主馬は、前から一度、直弼に会いたいと思っていた。これは主馬が伊勢の松坂に居た頃からの念願であったが、偶然、伊吹山の麓の市場村に住む医師、三浦尚之ひさゆきの家に、身を寄せたとき、三浦と直弼とが、茶友達であるのを知って、紹介の労を頼んだのであった。

三浦は、一足先きに出かけて行っている。彼は医者だから、大手をふって、埋木舎に出入しても、誰も咎める者はない。然し、見馴れぬ他国者の浪人が、直弼のところへ行つたとなると、藩の老職たちは、忽ち、目鯨を立てずにはいられないのだ。

(まだ、明るい。お城があんなに、美しい夕焼にかぐやいているうちは……)

主馬は、白い天守閣に、落日が七色の焰の様に輝くのを眺めながら、つぶやいた。諸国を遍歴してきた主馬は、各地の城を見たが、この城の規模と型式には、心をうたれた。彼にとって大好きな城の一ツとなった。

——もう暫く、時を消すために、主馬は堤を下りて、廓の中へ入っていった。

(こゝを歩いている分には、誰にも怪しまれる心配はなからう)

暮れかける頃の廓は、一入、色めき立って見える。せまい小路をはさんで、立ち並ぶ娼家の名は、金亀楼こんきうろう、八千代楼、清滝、春富楼、桔梗屋など——。いずれも、紅殻格子べにがらの奥のふかい、なまめいた色街のつくりである。

主馬には、伊勢で結ばれた妻があるが、この一兩年、とかく病がちだ。そのせいというわけで

もないが、さっき、堤の上と下で、目と目をかわした窓の女の顔が、意識のうちに、消えやらぬ……。主馬は、その倂を追う様にして、軒を接する紅い格子の家々の前を、そぞろ歩いた。然し、その女には行き当らぬ。

するうち、夕靄が漂ってきた。

(もう、ソロソロ、参ろうか)

と、主馬は踵を返して廓を出た。芹橋をわたって、川原町へぬけ、外馬場を廻って行くと、三味線をかゝえた女が、少し前を歩いて行くのが見えた。

男の足ゆえ、すぐ追いつき、そのまゝ追ひぬくとき、女がふりかえった。ニッコリ笑った。その目もとが、たしかに、さっきの窓の女に違いない。

「あッ、そこは、ぬかるみでございますよ」と、たか女が云った。

ところどころ、青い叢のしげるその道には、長雨のあとの水たまりが出来て居る。主馬は、うつかりして、もう少しのこと、それへ足をおとすところだった。

「御親切、かたじけない」

と、会釈と言葉を返した。ついでに、

「お城へ参るには、この道でよろしいのかな」

「埋木舎へお出でになるのでございましょう」

女は、並んで歩く様に、身を寄せてきて、云った。

「ホウ。よく御存じだな」

「今頃、お城に御用のある筈がございせんもの。さっき、お見受けしたときから、そんな気が

致しました」

「見るから、うろんな男と見えた様じゃな」

「彦根では、他国の御方は、みな、うろんでございます」

「はッはッ。御身の言葉は、一々、人の心をうがつ。御身こそ、今頃、どこへ行かれるのじゃ」

「家へ帰りまする」

「廓に住んで居らるゝのではないのか」

「芸を売って暮しては居りますが、まだ、心も身体も、売ったことはございません」

いつか二人は、油屋町から外濠に沿って歩いてくると、昏れかけるお城の本丸が濠の向うに、薄墨色にかすんで居た。辻を曲って、年若い藩士が二人、歩いてきたのが、主馬たちを見て、俄かに緊張する表情になった。通りすぎてからも、二三度、振返る様子だった。

「浪人者の仕合せじゃな」

「なぜでございます」

「はじめて会った御身とも、こうして並んで歩かるゝもの」

「ほんに、藩士たちの窮屈そうなのは、見るも気の毒でございます」

「とりわけ、直弼様などは、うっかり外も歩けぬそうじゃが——」

「彦根の藩では、総領の御世嗣だけがいゝ目を見て、御舎弟の殿たちは、家来たちより貧しい暮らしをなさるとか。直弼様も、たったの三百苞の、捨扶持しかないとのことでございます」

「時に、御身の御姓名が承りたい」

主馬は、城下の名物の一ツである「いろは松」のところまできたとき、立止って、やゝ気色ば

んで訊ねた。するとたか女は、又しても、心の先きを読む様に、

「御安心なされませ。今宵のことは、誰にも口外いたしませぬ。名もない女でございます」

「いや。再会の機を得たいからじゃ」

「では、金亀楼でお待ちいたしましょう」

「いつ？」

「明後日」

土佐の国から移し植えたという「いろは松」は、外濠の縁に、四十七株のみどりをたゝえて居た。

主馬はその下に立って、三味線を抱えた女が、城壁のかげに消える様に見えなくなるまで、見送っていた。

（まさか、狐狸のたぐいではあるまい）

主馬は、わが目をいぶかった。が、只の女とは思われぬ。押して姓名をきかなかったのは、こちらの不覚だったが、答えても変名なら、どうもなるまい。この頃は、女の身で幕府方の隠密をやる者もあれば、男まさりに勤王志士を気取る者もあるそうだから、恐らくは、そうした変り種の一人かも知れないが、それにしては、少々垢ぬけがしすぎている。

——濃い宵闇が、城壁の向うから流れ出てきた。

「主馬殿か」

と、突然、声がした。三浦北庵尚之の声である。

「暮れおちるのを待って居ました」

「宗観様には、お待ちかねだ」

宗観というのは、直弼の号である。のちに、無根水むねみづとも号した。三浦は、わざと、あたりを憚はばって、直弼の名を云わずに、雅号で呼んだのであろう。

主馬は、三浦のあとについて、松並木の道を歩いた。

「今、ふしぎな女に会いました」

と、主馬は云った。袋町の娼家の出会いからの経緯を話した。

「それは、拙者も初耳だ。袋町に、そんな女が居ようとは知らなんだ。美人か」

「花をあざむくばかりでござった」

「貴公は、国文の素養があるから、とかく、形容が多すぎる」

と、三浦は云った。

「しかも、先程、廊で見たまゝの姿で、三味線を小脇にかゝえ、外濠の夕闇を、歩いているには、驚き申した」

「貴公の行く先きを埋木舎と見破ったのが、甚だ怪しからん様にも思われるな」

「宗観様のことも、いろいろと噂して居りましたぞ」

そんな話をしているうちに、まもなく、埋木舎の門前に到着した。三浦は、勝手知った耳門みみどを押しあけ、主馬を門中へ引き入れてから、暫くそこで待つ様に命じ、自分は、玄関の中へ姿をかくした。

なるほど、平凡な建物である。もっとも、三百苞の捨扶持では、贅沢の出来る筈もないが、そ

れにしても、彦根三十五万石の御曹子の邸としては、あまりに粗末だ。

——玄関のすぐ前に、丸い石の井戸があった。清水がわいて居るらしい。主馬は、身をかぎめて、両手を洗った。

冷い水だった。心が引きしまるのを覚えた。

門に接して、古びた厩屋があり、愛馬がつかないであると見えて、蹄で土を蹴る音がする。

「主馬殿——サア、お入り」

式台に立って、三浦の呼ぶ声がした。

表座敷の床の間の前に、直弼が端坐していた。主馬は、三浦北庵尚之のあとについて、次の間に控えた。

主客は型の如く、挨拶を交わした。

「かねて御目通りの儀北庵殿からお願ひ致しておきました処、はからずも今宵お召しに預りましたは、長野義言、一代の面目とも存じまする」

日頃、人に対して臆する色のない主馬が、今夜はひどくコチコチになっていた。そこへ、若い女中が、紅の袷紗に、湖東焼の茶碗をのせて、あらわれた。

「サア、一服、おのみなさい」

と、直弼がすゝめた。主馬は遠慮したが、三浦もすゝめるので、一口、啜った。

「結構な服加減でございますな」

世辞ではなかった。島田に結った若い女中は、うやうやしく一礼して去った。

が、まだ、ぎごちない。主馬は日頃からの思いが胸に詰まって、何から話してよいか、自分に

もわからぬのである。すぐ前には、直弼の温顔がある。悠揚として迫るところのない感じた。和やかな春の日の海を思わせる。――

彼直弼は文化十二年十月二十九日の生れ。彦根城第二郭、「槻館」^{けきこてん}に呱呱の声をあげた。母は君田氏、名を富と云い、通称彦根御前と呼ばれる父直中の愛妾であった。だが、十四番目の末子のこととて、生れながらに、出世の望みを失わずには居られなかった。彼が、自分の住居に「埋木舎」なる名を附けたのも、わが身を埋木に擬したからだが、然し、風丰と云い、恰幅と云い、その一生を埋木に終るとは、到底、思えない。それだけは、主馬にもすぐピンときた。

「御身とは、同年の由だが――」

と、直弼が口を切った。それから北庵のほうへ、

「然し、北庵。こうして二人相對するとき、同年とは、よも見えまい」

「むろん、殿には、二ツ三ツ、御年上に見えまする」

と、北庵は扇いでいた扇子をとじて云った。

「以ての外じゃ。世間の経験と見聞に於て、長野義言こそ先輩じゃ。いや、世捨人も同様の私とでは、雲泥の差というものじゃ。直弼、今宵から、義言が教え子に相なろう」

「何ンと仰せられまする。勿体ないこと――」

「なまじ、藩主の子に生まれたお蔭で、二十八歳の今日まで態のいゝ囚われの身じゃ。滅多に外も歩けぬ始末だ」

と、直弼は自嘲する様に云った。酒肴が運ばれてきた。さっきの若い女中が、再び出て酌をした。